
歩が歩む世界

天草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歩が歩む世界

【Nコード】

N6834H

【作者名】

天草

【あらすじ】

男が女子高に転校する。

漫画やゲームではよくある展開で、王道といっても良いだろう。

まあ、王道つてぐらいだ。未だに人気も高いし、俺もそんな展開の物語は大好きだ。

でもそれは漫画やゲームのお話で、現実じゃありえない。

そう、ありえない……………はずだった。

これは俺こと櫛野歩が女装という名の鎧を身に着け、女子高
という名のダンジョンへと挑戦する話

プロローグ - 歩が歩む世界 -

男が女子高に転校する。

漫画やゲームではよくある展開で、王道といっても良いだろう。

まあ、王道つてぐらいだ。未だに人気も高いし、俺もそんな展開の物語は大好きだ。

でもそれは漫画やゲームのお話で、現実じゃありえない。

そう。ありえない はずだった。

「ねえねえ！ 櫛野さんつて、どんな男の人が好みなの？」

「あー、それ気なるかもお！」

目をキラキラさせながら、そう俺に質問をしてくる女子生徒。

転校初日。転校生になった人ならば、誰でも経験するであろう質問攻め。俺は今その質問攻めにあっている。

俺も一端の男だ。興味本位とはいえ、女の子からこれだけの注目を集めれば、悪い気はしない。むしろ嬉しい分類に入るかもしれない。いや、断言しよう。普通に嬉しい。

だが、それは俺がきちんとした男だったらの話だ。

今の文では勘違いする人も居るだろうから、一応言っておくが、俺は心も体も健全な男だ。

別に性転換手術を受けたわけでも、オカルトチックな方法で女の子になったわけでもない。

じゃあなんでそんな言い回しをしたのかというと、俺の格好に問題があるからだ。

冒頭で俺はこんなことを言った。男が女子高に転校することはありえない。

それは夢物語で、現実では起こりえない。俺もそう思ってたさ。

でも、それが現実になった。

「それにしてもー。よくそんなに早く制服を用意できたよね」

俺の着ている制服を指差しながらそう言ってくる女子生徒。俺はその差された指を視線で辿り、自分の着ている制服を見る。俺からすれば視線を下に落としたただけだ。

その落とした視線の先にあるのは、純白のブラウスに、臙脂色えんじの襟とプリーツスカート。

そこにはここ、南川女学院の制服に身を包んだ女装男子高校生の姿があった。

そう俺は、女装して女子高に通うという非現実を実現してしまったのだ。

これは現実じゃない。俺としてもそう考えたいのだが、首に巻いたチョーカーの慣れない息苦しさ、これを現実だと教えてくれる。

「えっと、その……」

俺がそんなことを考えている間も、次から次へと降りかかる質問、質問、質問。

そんな質問の嵐に戸惑っている俺は、助けを求めて視線を彷徨わせる。そして、俺の視線はとある人物の前で留まった。

そいつはこの俺、櫛野歩くしのあゆむがこの南川女学院に通うことになった原因を作った女だ。

「……………？ くす」

その女、藤宮夏月ふじみや なつきは、視線に気づくと俺の置かれた状況を瞬時に理解し、理解した上で、俺の様子を楽しむように笑った。あの野郎……。困ってる俺を見て楽しんでやがる。女だから野郎では無いが、この際そんなことはどうでも良い。

そもそも俺の生活が一変したのは、ある夜の事。

俺が元々通っていた高校から帰宅した直後のことだった……。

第一話 歩と藤宮家の関係

目が覚めたら、見知らぬ天井がそこにはあった。

別段、そのことについて驚いたわけではない。だってそうだろう？

見知らぬ天井なんて、要は自分が知り得ていない天井なら、それが全て見知らぬ天井になるのだから、不思議な事でも何でもないわけだ。

見知らぬ天井。見知らぬ場所。見知らぬ部屋。見知らぬ人物。今、俺の目の前に広がっている光景だって、何の不思議でもない。全てが全て日常に有り触れた物だ。

ただそれに『目が覚めたら』などとあった場合は、注意をしなければならぬ。

なぜならそれは、自身が意識を失い覚醒するまでに、何事かの事に巻き込まれている可能性があるからだ。もちろん単に寝ぼけていたり、泥酔していたりとで、記憶が曖昧になっているだけという可能性も考慮した上での話だ。そこは分かるよね？

ところで。

「ここはどこなんだろう？」

まさか本当に『目が覚めたら』などという事が起きるとは俺も予想外だった。

俺は寝ていたソファから上体を起こすと、周囲を観察する。

そこは部屋だった。ただし一般家庭ではあり得ない広さの部屋で、ここが部屋だと判断できたのは、机や本棚、俺が寝かされていたソファなどの、家具が置いてあったからだ。

内装は、洋風を基調とした高級感溢れる造りで、家具は言うに及ばず、その部屋の全てが気品のある物に仕上がっていた。

俺は試しに頬を抓ってみた。……痛い。非常に痛い。どうやら、

夢でも意識が混濁しているわけでもないらしい。俺はもう一度室内を見回す。

しかし、俺の記憶にはそのどれもピンと来なかった。どこをどう見ても俺が訪れたこともないような場所だ。

俺は広い部屋の中を一周すると、元居たソファへと座り直す。記憶を掘り返してみる事にしたのだ。

確か今日は平日で、俺は自分の高校へと足を運んだ。退屈ないつも通りの授業を受けて、友達とくだらない話をしながら昼飯を食べた。大丈夫だ。ここまではきちんと思い出せる。

その後は午後の授業を受けて放課後を迎えた。部活のない俺は、部活へと向かう友達に別れを告げて、帰宅の途に。あれ？そこまで良い。それからどうしたんだっけ？

落ち着け。落ち着け俺。えっと、確か。……………っ！

そつだ。父さんに今日は店の手伝いがあるから、早く帰ってくるように言われてて、家の近くまで帰ったところを。

「車で拉致された」

飛び上がった。人類飛び上がり選手権などというものがあつたら、間違いなく優勝を狙えるほどに。それぐらい驚いた。

声は俺の後方から。俺は恐る恐る後ろを振り返った。

「もう起きたのね。あの子の話だと、後一時間ぐらいは目を覚まさないって事だったけど」

それは女の子だった。年は俺と同じくらい。整った顔立ちに雪のように白い肌、腰まである長い黒髪は絹のように滑らかでとても綺麗だった。

俺は驚いていた事も忘れ、ついその娘をまじまじと見つめてしまう。その娘も俺を見つめ返してきた。その瞳には何事にも動じない

確かな意思を感じた。

「君は……?」

その娘は俺の言う事には答えずに、俺の対面にあるソファへと座った。綺麗な脚を組むと俺を見据えてくる。うむ。実に良いおみ足である。

「藤宮 夏月」

聞き逃しそうになった。けしてこの娘の足に夢中になっていて、聞き逃しそうになったとかではなく、ただ単に突然の自己紹介だったからだ。本当だよ。嘘じゃないよ。

「あなた、意外と落ち着いているのね? 私はもっとパニックになる姿を予想していたのだけれども」

「いやいや、これでも十分驚いてるよ? イッツ・アメージング。ほらね?」

「ほらねって、そんな片言の英語で言われてもね」

つまらないわとその娘は呟く。どうやら俺は、ご期待に副える事ができなかつたようだ。

「そんな事より、えっと、藤宮さん……だっけ?」

「ええ、そうよ。榎野 歩君」

「藤宮さんが俺をここに連れて来たの?」

実行犯ではないけどねと答える藤宮さん。

藤宮さんは俺の名前を知っていた。どうやら無差別に拉致を行つたわけではなく、きちんと俺自身を狙つた犯行のようだった。

「ついでに言っておくと、ここは藤宮家。私の自宅よ」

藤宮さんが指すのは、この場所、正確にはこの豪邸の事である。

「藤宮エレクトロニクスの名前ぐらいは聞いたことあるでしょ？」
と藤宮さんは補足を加えてくれた。藤宮さん曰く、

藤宮家は戦後、エレクトロニクス事業で財を成した日本でも有数の財閥で、家柄の歴史こそ浅いが、その筋ではかなりの『力』を獲得している、藤宮さんは語る。

最初はピンと来なかつた俺も『藤宮エレクトロニクス』と聞いて思い当たった。

藤宮エレクトロニクスといえば、全国に数多くの店舗を保有する大手電気メーカーで、俺もテレビのCMなどでその存在は知っていた。実際にお世話になつたお店でもあるしな。

「それで？ そんな財閥の藤宮さんが、一般市民である俺に何の用で？」

「あなた、本当に淡白な人ね。これを聞いて他に言う事はないのかしら？」

「それを言つて帰してくれるのなら、いくらでも言っけど？」

「それは無理ね」

分かっていった。そもそもただ用があるだけなら、拉致などという行為を行うわけがない。普通に呼び出せば良いだけなのだから。

それを拉致などという犯罪行為をしてまで連れて来たのだ。そう易々と帰してくれるわけではない。どうやら俺の考えは間違っていたようだったようだ。

「試しに訊くけど……なんで？」

俺は藤宮さんを見据える。藤宮さんは俺の言葉に考えるような素振りを見せると、黙りこくってしまった。考えをまとめているのかもしれない。そう思っていると、

「榎野君」藤宮さんが口を開いた。

「うん、なに？」

どんな答えが来るかと俺は身構える。しかし、口を開いた藤宮さんの答えは俺の予想を遥かに上回るものだった。

「あなた……いいえ。榎野 歩は私の物だからよ」

「………………。ん？」

固まった。それはもう瞬間接着剤でも、こうはいかないんじゃないのかな。いかなってぐらいカチカチに。藤宮さんは今何て言った？ 私の物？ 何が？ 榎野 歩？

「………………。榎野 歩って はっ！ 俺の事が っ！」

「ずいぶん鈍い反応ね。あなたには本当に神経が通っているのかしら?」

酷い言われようだった。しかし、今はそれどころではない。私の物って、つまりこれは、世に聞く『愛の告白』というやつではないだろうか。英語で言うところの「アイラブユー」。

言い方ややり方はその少し……いやかなり歪んではいるが、俺にも春が来たと喜ぶべきなのではないか? だってそうだろう? 愛の告白だぞ? 中国語で言うところの「ウオーアイニー」。

女の子からの告白なんて都市伝説か何かだと思っていたぐらいなんだ。この際、細かいところには目を瞑ろうではないか。愛の告白なんだから。古風に言うとお慕い申しております。

「そんな、俺達はまだ出会ったばかりだよ? いきなり告白なんて

」

「告白? ……ねえ? あなた、何か勘違いしてない?」

「まずは交換日記から。へっ? 勘違い?」

やっぱりねとため息をつく藤宮さん。

勘違い? 実は前に会った事があって「私が歩のお嫁さんになってあげる」的な約束を藤宮さんとしていたとか?

「違うわ。何で私がそんな約束をあなたなんかにならなければならぬのよ」

軽く。いや、かなり傷ついた。藤宮さんの言葉ってナイフで傷を抉るようだよね。

「これを見て」

そう言って藤宮さんが取り出したのは一枚の紙。そこに踊る文字は。

「契約書？」そこには箇条書きでこう書かれていた。

『櫛野家一同。契約により指定金額を提示できなかった場合は、身柄を藤宮家に帰属する』

他にも文章が並べてあったが、一番目を惹いたのはその一文だった。身柄を帰属とはどういう事だろうか？

「意味も何も、そのままの意味よ」

「だって、帰属って普通、財産や権利に使う言葉であって」

人間に使う言葉じゃない。そう言おうと思って、俺は藤宮さんの言葉を思い出した。彼女はあの時何と言ったのか。

『あなた……いいえ。櫛野 歩は私の物だからよ』

嫌な予感がした。言わば第六感というやつだ。信じたくはないが、頭にはある一つの答えが浮かんでいた。藤宮さんの言葉をそのままの意味で捉えるとその答えになる。

「私の物……って、まさか……」

「ええ。たぶん、あなたが思っている通りのことだと思うわ」

「言葉通り、俺達を本当に帰属する　ってことなのか」

つまり俺達櫛野家の人間は、お金や土地のように藤宮家の『物』になるという事だ。少なくとも藤宮さんが掲げている契約書にはそう書かれている。しかし、俺はこんな契約書に見覚えがなかった。もちろんサインをした記憶もない。

「それはそうよ。この契約を結んだのは私とあなたの両親なのだから」

「父さんと母さん　が？」

ええと頷く藤宮さん。彼女が言うにはこれは今から十年前の話なんだそうだ。

俺の両親と藤宮さんの両親は、学生時代とても仲が良く、互いが結婚した後も懇意な間柄が続いていた。そんなある時、俺の両親が店を持ちたいと考えていることを、藤宮さんの両親に告げたのだそう。しかし俺の両親は所謂、駆け落ちで一緒になった夫婦で、担保にできる物もなく、また立場上、店を建てる資金を借りる事が難しい状態にあった。

そこで助け舟を出したのが、藤宮さんの両親だったわけだ。

しかし、俺の両親は最初それを拒んでいた。当たり前だ。いくら仲の良い間柄とはいえ、店が一軒建つ様な大金を借りるわけにはいかない。

だが同時に、他に借りる場所も無く、彼らから借りるしか無い事も事実だった。悩む両親に藤宮さんの両親はこう切り出した。ならば賭けをしないかと。

藤宮さんの両親が言う賭けとは、こう言う事だった。

『十年後の今日。指定した金額を提示する事ができたら、借りたお

金は返さなくて良い』と。

つまりは十年後までに、藤宮夫婦の指定した金額を売り上げてみせるとそういう事だった。

指定した金額は、個人経営のお店が正念場を迎える十年という年数で稼げる、ギリギリのラインの金額だった。しかし、けして悪い話ではなかった。むしろ無利子、無担保で借りられるというだけでもかなりの好条件であった。

だが、賭けとは片方が条件を出しただけでは成立しない。そこで、藤宮さんの両親が俺の両親に出した条件が。

「提示できなかった場合は、身柄を藤宮家に帰属する……か」

「そういう事」

たぶん藤宮さんの両親はお金を借り安い様に、こんな賭けを提案してくれたのだと思う。もしかしたら、最初から全額あげるつもりだったのかもしれない。でも。

「父さんと母さんは、それを稼ぐ事ができなかった」

俺が店を手伝っていた限りでは、それなりに繁盛している様に見えた。だけどそれはそう見えていただけで、その実あまり儲かってはいなかったのかもしれない。

「櫛野君、それは違うわ。一応、櫛野夫婦の名誉のために言っておくと、あなたの両親の経営方法に問題はなかったわ。むしろ順調にいけば余裕を持って、指定金額に達していたでしょうね」

藤宮さんは、紙が何枚も重なった分厚い資料をパラパラと捲りな

がら、その口にする。きつとあの資料には、櫛野家の店に関するデータが記してあるのだろう。

「問題はなかった？　じゃあ何で……？」

「……そうね。原因はこれ」

俺の疑問にそう言って見せてくれたのは、父さんについて記してある一枚の資料。そこには父さんの経歴やプロフィールなどの個人情報がかつていた。藤宮さんはその資料のある部分を指差す。そこには、

『知人に頼まれ連帯保証人となる』と書かれていた。

つまり、これが原因という事は　。

「その知人に逃げられたというところかしら。きつと自分達の事があつたから、ほつてはおけなかつたのでしょうかね」

そのせいで上昇傾向だつた経営状態が、ガタ落ちしてるわと藤宮さんは教えてくれた。

「人を助けて、自分の首を絞めてどうするんだよ……父さん……」

「確かに、少しお人好し過ぎる気がするわね」

藤宮さんの言う通りだつた。家族の大黒柱にしてはあまりも軽率過ぎる行動である。せめて家族に一言相談するとかしてくれれば良いものを……。

「まあ、どんな理由があろうと契約は契約よ。これで分かったでしょ？ あなたが私の『物』だという理由が」

「マジかよ……。それで、その父さんと母さんは今どうしてるんだ？」

「そうね」

今は『世界一素晴らしい仕事』で有名な島にでも、居るのではないかしらと答えてくれた藤宮さん。そこがどこだか知らないが、どうやら日本国内ではなく海外のようだ。

「櫛野夫婦の身柄は私の両親が、そして櫛野君を私がもらい受ける感じで三分割にしたの」

「三分割って、俺達はバラ売りのケーキか何かかよ」

「そうね。似たような物かしら？」

似てねえよ！ と思わず叫びそうになるのを俺はぐっと堪える。考えてみれば、俺の立場はこの藤宮さんの一言で全て決まってしまう状態にある。下手に事を荒げない方が得策だ。

しかし、藤宮さんはそんな俺の心意を見抜くように、

「そんなに気を使わなくても、悪いようにはしないわ」と口にした。

「……本当か？」

「本当よ。言ったでしょ？ 私の両親とあなたの両親は懇意の間柄だって。私があなたに酷い事をしようものなら、私が両親に叱られ

てしまうわ」

だから今海外に居るのだって、単に四人で海外旅行に行っているだけよと藤宮さんは付け加える。俺は藤宮さんを見据えるが、嘘をついているように見えなかった。

「……分かった。信じるよ」

俺はため息を一つ吐くと、自分の立場を受け止める。少なくとも悪い人ではなさそうだ。

「そう、ありがとう。じゃあさっそくで悪いんだけど、あなたにやってもらいたい事があるの」

「やってもらいたい事？ ……ああ、そうか。藤宮さんの『物』になるって事は、命令される立場になるって事だもんな」

俺は一人納得する。それは諦めに近かったのかもしれない。

しかし俺はこの時、この女の本当の恐ろしさに気付いてはいなかった。後で思った事だが、この時の俺は父さんの事を言えないほど軽率で、考え無しだった。

だからかもしれない。この女が、

「じゃあこの服に着替えてくれるかしら？」との言葉に首を縦に振ったのは。

第二話 歩が戸惑う転入宣言

幼い頃。それこそ俺が、小学校にすら入学していなかったあの頃。一度だけ、近所のお姉さんに女の子の格好、女装をさせてもらったことがあった。

幼い頃なんて男も女も変わりが無い。顔だって体格だってそうだが、それこそ、服装や髪型ぐらいで差別化を図るしかないほどに。

だからかもしれない。お姉さんは女装した俺を見て、

「可愛いよ。似合ってる」そう言って褒めてくれた。

俺は褒められる事よりも、お姉さんが喜んでる姿を見るのが好きだった。もしかしたら、それが俺の初恋だったのかもしれない。

あれから幾年が経った。そのお姉さんはもう近所には居ない。どこかに引越してしまったのだ。お姉さんが引越してしまったてからは、俺も女装をすることはなくなり、もはやそのお姉さんの顔を思い出す事もできなくなってしまった。

なのに。

「なあ？ 一つ訊いて良いかな？ 藤宮さん」

「ぶつ。な、なに……かしら？ くくつ。 榎野君……」

藤宮さんが笑いを堪えていた。それは間違いなく俺の格好を見ての笑いだろう。

俺は藤宮さんに言われた通りに用意された服へと着替えた。藤宮家の使用人の方に「こちらへどうぞ」と促され別室へと向かった。良いが、俺の着ていた服はすぐに没収され、俺は仕方なく用意された服を着る事になった。

ここで一つ言っておくと、俺が『仕方なく』などという言葉を使ったのには訳がある。

俺は自分で言うのも何だが、ファッションにはてんで疎い。それこそ着られれば問題ないと思っっているぐらいにだ。

だから、用意された服のデザインが気に入らないとか、コーディネートが良くないとか、そういう事で『仕方なく』を使ったわけじゃない。ついでに言っておくと、サイズだってピッタリだった。オーダーメイド仕様だとかで着心地も抜群だ。

じゃあ何が『仕方なく』なのか。そうだな。それはこの服が。

「何で俺が、スカートを穿かないといけねえんだよおおっ
！」

「よく……ぶっ、似合って……くふふ、似合っているじゃない」

女物の服だという事だ。純白のブラウスに、えんじ臙脂色の襟とプリーツスカート。見てみればそれは学生服のようだった。

「どう見ても似合ってるって、反応じゃないよね！？ それっ！」

「そんな事はないわ。キチンと似合っているわよ。可愛いわ、くふふ野君」

「今、俺の名前を『くふ野君』って言ったろ！ 笑い声と名前が一緒になってるぞー！」

「じ、ごめん……なさい。でも、くふっ……ここまで似合わないとは……おも、思わなくて……。くふふ……あははははっ！」

ついに我慢ができなくなったのか、本音と共に笑い声を上げ始め

た藤宮さん。

俺もさつき鏡で自分の姿を確認したが、確かにこれは酷かった。一応、藤宮家の使用人の方に長髪のカツラと化粧をしてもらったのだが、それでも絶望的に似合っていなかった。

考えてみれば女装が似合っていた年齢は遙か昔の事、今となつては身体も成長しているし、声変わりだつてしているのだ。おまけに美形とは程遠い顔をしている俺にとっては、似合わない事が当たり前と言えた。だからといってそこまで笑う事はないだろう……。

「……こほん。ごめんなさい、少し取り乱したわ。それにしても……ふふ、可笑しかった」

「あーそうですかー。そりゃーよーござんしたねー。人類笑い声選手権にでも、出られたらどうですかー。俺が主催しますんでー」

「ふふ、悪かったわよ櫛野君。そんなにいじけないで」

いじけてないやい！ と言う俺に笑いながら謝る藤宮さん。反省の色など欠片も見えなかった。まあ、別に良いけど。俺は全然気にしてないし。気にしてないし……。

「ところで、何でこんな格好させたの？ どこかの学校の制服みたいだけど」

俺はカツラを取り化粧を落としながらそう聞く。まさか、メイク落としなどという代物を使う時が来るとは思いもしなかった。

「そうね。嫌がらせ兼趣味……かしら？」

「なっ　っ！」

「冗談よ。だから、化粧を半分落とした顔をこちらに向けられないるかしら。あしゅら男爵のようになってるわ」

「お許してください、Dr. ヘル様ってか？ 俺だって好きでこんな事してるわけじゃねえよ！」

藤宮さんは俺の顔を見るなり、気味悪そうにそう言った。なるほど確かに、男半分女半分の悪の帝国の幹部に見えなくもない姿だった。実際はサイボーグでもなければ、光線も出せないけどね。

「その制服は私の通学している学校、南川女学院の制服よ」

「南川女学院……。あーなんか聞いた事があるな。確か全国でも有数のお嬢様学校だとか何とか」

南川女学院といえれば全国でも指折りのお嬢様学校で、校訓の『利を求め、真意を覚られず』の基、この学校で得られる利益（人脈、技能、技術、作法、礼儀等）をどれだけ上手く物にする事ができるかを培う一種の養成所といえる学校だ。お金持ちのお嬢様にとっては、この学校を卒業する事が一つのステータスと考えられているらしい。俺も藤宮さんから今聞いた話だから詳しい事は知らない。せいぜいお嬢様学校だって事を知っていたぐらいだ。

「更にいえば、この学校の制服って人気が高いのよ。だから、あなたにプレゼントしようと思って」

「何故に！？ そんなのいらないよ！ 君は俺を何だと思ってるんだ！」

「えっ？ 女子生徒の制服収集家と聞いていたのだけれど……」

「誤解以外の何ものでもねえ！ 誰だ！ そんな事を吹聴して回ってる奴は！」

「あなたのお父さん」

「あの野朗おおお

っ！」

「……嘘。冗談よ」

あなたがキチンと反応してくれて嬉しいわと藤宮さん。どうやら彼女は俺が最初に淡泊な反応しか見せなかった事が、気に入っていなかったようだ。そら俺だって、強制的に女装までさせられたとあつちや、何か思う所も出てくるってもんだ。

しかしと俺は改めて自分の着ている南川女学院の制服を見る。

可愛らしさの中に気品さを織り交ぜたようなそんなデザインに、触り心地、着心地の両方をクリアした材質。確かにファッションに疎い俺でも、それは可愛らしいと思える物で、学生からの人気が高い事にも頷ける物だった。自分自身で着たいとは、これっぽっちも思っちやいなかったけどね。

まあ、とにかく。

「もうそろそろこれ脱いでも良いかな？ もう十分俺で遊んだろ？」

俺はそう藤宮さんに訊いた。だが、藤宮さんは首を縦には振らない。

「ダメよ。それはあなたのためだから」

「だからいらないうて。女物の制服なんて持ってもしょうがないだろ？」

「いいえ、あなたにはその制服が必要になるわ。だってそれは」

しかし、それでも藤宮さんが頷くことはなかった。業を煮やし始めた俺に藤宮さんは口を開く。そこからとんでもない発言が飛び出した。

「あなたがこれから通学する事になる学校の制服なのだから」

「………………。はぁ？」

これが既視感というやつだろうか？ つい最近にも同じようなとんでも発言を聞いて、固まってしまったような覚えがある。今度はなんだ？ 通学？ どこに？ 女子高？

「………………。通学って はぁ！？ 俺が？ 女子高に つ！」

「そうよ。あなたには、その制服を着て南川女学院に通学してもらおうわ」

いやいや、何を言っているんだ藤宮さんは。どう考えてもそんな事は不可能だ。常識的に考えても無理な話だが、さっきも言った通り、俺の女装は絶望的に似合っていなかったんだぞ。それはカツラを着けても化粧をしても だ。

「そんな事は見れば分かるわ。どう見ても女装した男にしか見えな
いものね」

「だったら」

何でという俺の言葉は続かなかった。それは俺の隣に、ある一人の人物が立っていたからだ。その人物は俺の肩を叩くと、

「それは私にお任せなのですよー！」と元氣良く発言したのだった。

第三話 歩が混乱する科学力

「どうもー。ステラ・アルバ・コールフィールドです。ステラって呼んでくださいねー」

俺の前に現れたのは、メイド服に身を包んだ一人の少女だった。彼女は、フリルをふんだんに使ったスカートやエプロンを揺らしながら、俺に挨拶をしてきた。

年齢は俺や藤宮さんと同じぐらい。流れるような銀髪に、宝石のように輝く碧眼。肩までで揃えられた髪を片方で結ぶ（ステラの場合右側）サイドポニーが、彼女の天真爛漫さを表しているようだった。

「メイド……さん？」

俺はステラの姿に疑問を覚えていた。それは彼女の着ているメイド服の事である。

メイド服といえば女中さんが着用する仕事着で、それ自体は彼女が使用人であるとするならば、何らおかしい事ではないわけだが、俺はその事に違和感を覚えていた。

なぜなら俺が見た使用人の中で、メイド服を着用していたのがこのステラという少女だけだったからだ。

ステラは俺の視線を受けるとニコリと笑った。それは俺の疑問を感じ取るようだった。

「おやおやー櫛野さん。その目は疑問を持った目ですねー」

分かりますよーとステラ。彼女は事前に俺の名前を聞いていたのか、俺の名前を呟くとそう口にした。なかなか鋭い娘（こ）なのかもし

れない。

「榎野さんが注視していたのはこの服　そこから導き出せる疑問はズバリ！」

「……ズバリ？」

「この服のサイズ！　つまり、私のスリーサイズについてのご質問ですねー。いやーん。榎野さんのエッチスケッチワンタッチー」

前言撤回……。

「……この今世紀最大のアホの娘は？」

「ステラ。藤宮エレクトロニクス、技術開発室・主任よ」

「今世紀最大！？　夏月さんも『アホの娘』固定で話を進めないでくださいよー」

技術開発室・主任。藤宮さんが言うにはそうらしいのだが、どう見てもアホの娘　いや、普通の女の子にしか見えない。それにそのメイド服は何なんだ？

「なーんだ、疑問ってこれの事ですか。お答えするとただの趣味ですよー。いじよー」

男の子なら、もっと思春期全開な質問をしましょうよーとステラ。彼女はつまらなそうに俺の方を向く。アンタは思春期の男を何だと思ってるんだ。

「趣味……?」

「そうですねー。だって、ここのお手伝いさんの服って、メイド服じゃなくて専用の制服なんですよー。ロマンがありません。櫛野さんもそう思いませんかー?」

確かに俺が会った使用人の方達は、皆揃って同じ制服を着ていた。凜々しく動きやすい作りをしているようで、あれはあれで格好良いと俺は思ったがな……。

「ええー。そんなー。櫛野さんなら分かってくれると思ったのにー」

「ロマンじゃ仕事は勤まらないでしょ? 私だって、伊達や酔狂で彼らを雇っているわけではないのだから」

ついでに言えばあなたもねと藤宮さんはステラを見る。

「仕事ですかー。嫌ですねー。私はチラリと非生産、非労働、非戦闘を表す『フリル』を見せ付けているわけですがー」

「働かざる者食うべからず よ。給料が欲しいならキッチンと働きなさい」

これ、残業手当付くんですかねーと渋々何かしらの準備を始めるステラ。何だかテンションの上がり下がりの激しい娘だな。

「櫛野君。さっきの話なのだけねど」

さっきの話というのは、俺が南川女学院に通学するという、あのとんでも話の事だった。

「だから、そんなの無理だって」

「ええ、私もそう思ったのだけれど、どうしても櫛野君を通学させたくて」

ある物をステラに頼んだのと藤宮さん。何もそんなことに力を入れなくても良いのに。

しかし、何を作らせたのかは知らないけど、ちょっと何かしたぐらいでどうにかなる問題じゃないと思うんだけど……。そう思っている」と、

「準備万端なのですよー」とステラがこちらへとやって来た。その手には小さな黒い箱が握られている。そして、

「はい、これ。櫛野さん」そのまま黒い箱を渡された。これが『ある物』なんだろうか？

「これは……首輪？」

渡された黒い箱を開けると、中には硬質な赤い輪が収められていた。デザインは至ってシンプルな物で、特徴的なのは横にボタンのような突起物がある事ぐらいだ。

「いやですねー櫛野さん。チョーカーですよ、チョーカー」

チョーカー。どうやらこういった装飾品の事をそう呼ぶらしい。俺にはどこが違うのかさっぱり分からないが、首輪のファッション的な呼び方でも認識しておこう。

とりあえず自分の首に着けてみる。

カチツという留具同士が噛み合う音と共に、慣れない息苦しさが伝わってきた。すげえー違和感。一応、鏡で確認。うん、似合っていない。

そう思っていると、チクッ。

「痛ッ！」

俺の首。正確にはチョーカーを着けた部分に鋭い痛みが走る。

「すみません。痛かったですかー？」

そんな俺にステラが謝る。何事かと聞けば、

「血液と遺伝子に依る、認証システムの登録に必要なだったので」とステラは答えた。

「へっ？ 認証システム……？」

認証システム。聞き慣れない単語が俺の耳へと届いた。ステラは一体何の話をしているのだろうか？ よく見れば彼女は小型の電子機器を操作している。

「えっと、どういうこと？」

詳細を訊こうと俺は口を開くが、彼女は操作に夢中で答えてはくれなかった。仕方なく操作を終えるまで待つ事。数分、

「よし。これで登録かんりよー」とステラがようやく電子機器から顔を上げた。

こほん。ステラは咳払いを一つすると、俺と藤宮さんの方へと向き直った。そして、芝居染みた喋り方で大仰な仕草を見せる。だが

「えー Ladies & Gentlemen 紳士、淑女の皆さまー。お待たせしましたー」

「前置きは良いわ。ステラ」

速攻で切り捨てられた。

「ええっ!?!? まだ挨拶もしてないのにつ!」とステラが慌てるが、雇い主には逆らえないのか渋々続きを話始める。少し、ほんの少しだけステラに同情した。

「えーここにありますが。ただのチャーカーではなくー」

ステラのテンションが駄々下がりだった。言葉や態度に適當さが滲み出る。分かり易い娘だな。ホント。

「ここに居るー。女装変態野朗でもー」

……おい。女装変態野朗とは何だ。俺の同情心を返せ。そう思っているよ、

「あーもう。面倒くさいので、はいポチっとな」とステラが俺の首元に手を伸ばした。

カチツ。その手がチャーカー横の突起物 ボタンに触れる。すると。

グラツと視界が揺れた。まるで放送していないチャンネルへと、画面を切り替えた時のような砂嵐。ジャミングを受け、電波障害を起こした電子機器のようにグラグラと。

「な、何だ……これ……？」

だが、それも時間にして数秒の事。俺は混乱する頭とは別に、急にクリアになった視界を頼りに辺りを見回す。そしてその視線は、ある一点を見つめたまま止まってしまふ。

「……………」

俺は言葉を忘れ、その信じられない光景をただ啞然と見つめる。

……あり得ない。そんな事はありません。俺は何度も頭の中でそう繰り返した。だが、目の前の光景は一向にしてその姿を変えない。俺の目の前にあるのは鏡だ。何の変哲もない。ただの鏡。しかし、その鏡の中には非現実的な者が映っていた。

「嘘、だろ……」

鏡に映るのは、制服を着た少女の姿。しかしそれは、藤宮さんでもステラでもない『三人目』の少女だった。切れ長の目に、茶色がかった長い髪。しなやかな足にポニーテールに結ばれた髪が、活発そうな顔の少女によく似合っていた。

いや、違う。今はそんな事どうでも良いのだ。問題は、その少女が驚愕の表情を浮かべている事。そう。俺とまったく同じ表情をしている事だ。

俺は鏡に近づく。少女も俺に近づいて来た。鏡の中で。俺は戦慄した。つまりこれは、

「俺が女になってる……」そういう事だった。

しかもよく聞けば、変声期をとつた昔に迎えた俺の音が、高いキ
ーの、まるで女性のような声に変わっていた。

「どうですー？ 良い出来でしょー？」

それはステラの声だった。向けられたのは雇い主の藤宮さん。

「へえ……。これは驚きだわ。良い出来なんて物じゃないわね……」

「えへえー。それほどでも ありますよー。もっと褒めてー！」

藤宮さんの言葉に満足げに笑うステラ。給料アップなどと聞いて
テンションを上げている。

だが、俺はそれに構ってはいられない。それどころではないから
だ。

自分の性別が一瞬にしてチェンジした。これは立派な異常事態だ。
この世界はいつからそんなファンタジーチックな事になったんだ？

「櫛野君」

一瞬、反応が遅れた。頭の中が絶賛混乱中というのもあったが、
自分の姿が意思とは関係なく変わったことに『自分が本当に自分な
のか』と、自我を保つ事に必死だったこともある。

「どっつ、なってるんだ。これ……？」

「ごめんなさい。やっぱり事前に説明を要れるべきだったわね」

俺があまりの狼狽っぷりを見せたためか、そう申し訳なさそうに言う藤宮さん。

「でも、事前に説明しても理解されないかなーっていうのも、あったんですよー」

ややこしい事でしたしーとステラ。確かに『今からあなたの性別が変わります』なんて言われても、そうですかと受け入れられる自信はない。というか、現在進行形で受け入れられてないしな。

「だからステラも、説明を除外して形から入った　と、非常に怪しいけどな」

あの時、面倒くさいとか言ってたしな。ステラの奴。

「いやー本当ですってばー榎野さん。面倒なんてのは、建前ですよー。た・て・ま・え」

にははと笑うステラ。これは面倒だっという方も本当の事だな。

「そんな事よりもー。性別チェンジの種明かしを、聞きたくはないですかー？」

ほれほれ、榎野さんとステラが誤魔化す。立場が悪くなった事に気づいたのだろう。確かに最優先で聞きたい事ではあるわけだから、まあ良いか。

「ではではー。種明かしと参りましょー。皆さんお気づきかと思いますが、秘密はそのチャーカーにありますー」

ステラが指差すのは、俺の首にあるチョーカー。俺はチョーカーに指を沿わせると、性別が入れ替わる直前にステラが触れていた事を思い出す。

「そつだ。確か横にあるボタンが何かに触れたとたんに、視界が揺らいで」

気付いたら女になっていた。そんな流れだった気がする。

「それが夏月さんの注文でしたからねー」

「私は櫛野君が『女に見えるような物を』と頼んだだけなのに」

試作品を見た時は、今より驚いたわと藤宮さん。その時はステラの着ている洋服が、一瞬にして別の服に変わったのだそつだ。確かにそれだけでも驚くには十分だろう。

「そして、それに改良を加え、ついに完成したのが『チョーカー型変身デバイス・メタモ君』なのですよー！」

じゃーんと口で言いながら、そう宣言するステラ。しかもご丁寧に紙吹雪までもが、俺の頭上からヒラヒラと降ってきた。どこから用意したんだよ、そんなもん。

「チョーカー型変身デバイス？」

「はいー。簡単に言うと、女の子に一瞬で変身できちゃう装置の事なのですよー」

なるほど。確かにステラの言う通り、俺の姿が女へと変身した。

いわゆるメタモルフォーゼというやつだ。

「まあ、変身と言ってもー。実際に櫛野さんの性別が変化したわけではないのですがねー」

「というと?」

「櫛野さんは、パワードスーツってご存知ですか?」

パワードスーツ。その名前は、SF物の物語なんかで目にしたことがあった。確か強化服や強化外骨格などと呼ばれていて、使用者が身体の上から装着することで、筋力や運動能力を飛躍的に上げることができるとか何とか。一言にまとめると『着ると凄く強くなるスーツ』みたいな感じだ。

「その解釈はどうかと思いますが……。まあ良いでしょうー」

呆れられてしまった。俺としては的を射たつもりだったんだが……。

「パワードスーツ。正しく言えばPowered exoskeleton。それが、櫛野さんが現在装着している物の正体なのですよー」

「パワードスーツ? これが……?」

俺は手を開いたり閉じたりを繰り返す。しかしその手は白くしなやかで、とても人を超えた力を発揮できるようには見えなかった。質感だってスベスベだ。

「そうですねー。まずですねー。櫛野さんを量子化、収縮し再構成。そこに被せる様に人工骨格、人口皮膜を展開。脳から発せられる生体電位信号を

「ちょ、ちょ、ちょっと待て！ もうちょっと分かり易く言ってくれ。さつきから難しい単語が飛び交い過ぎだ」

うーん。分かり易くですかー？ とステラ。彼女は俺の要求に悩む仕草を見せる。だが、そうしてもらわないと、俺には理解できそうにもなかった。仕方ないだろう。一介の高校生に科学のあれやこれやを理解しろという方が酷なのだ。

そうこうしているうちに、ステラはポンと手の平を叩くと、

「凄い科学力で作った、凄く強い女の子に変身する、凄い装置っ！ なのです！」

そうドドン　っ！ と胸を張った。確かに分り易いが、もの凄く安っぽくなった。

「ナ、ナンダッテー」

「ちょっ、櫛野さん！ その反応は酷くないですか！ あなたの要求にステラは応えたのに　っ！」

「いや……だつて、なあ？」

「ええ……。いくら何でもあの説明はないと思っわ」

同意した藤宮さんも呆れ気味だ。というか、あの『凄い』連呼がはたして説明と言えるのだろうか。いくら何でも適當過ぎやしない

か？

「ところでこれ、元に戻るのか？」

俺が重要な疑問を口にすると、

「はいーもちのろんですよー。もう一度、変身した時と同じボタンを押してくださいー」と、

ステラがあっさりと答える。言われた通りにチョーカー横のボタンを押す。

カチツと例の動作音と共に、変身前と同じような視界の揺れを感じ、次にクリアな視界を取り戻した頃には、元の男の姿に戻っていた。声も女性の物ではなく、きちんとした男の　俺の声へとチェンジ。お帰り俺の身体と声。

「おおっ！　本当に戻った………すげえ………」

「当たり前なのですよー。この私が設計から製造までの全てを担当したのですからー」

感心する俺に胸を張るステラ。確かに信じられない科学力だった。どうやら技術開発室・主任の肩書きは伊達ではないようである。

「そつえば、性能テストはしなくて良かったのですかー？」

元に戻った俺にそう問いかけるステラ。俺は首のチョーカーを外しながら答える。

「気になるところではあるけど、今は良いや。正直、アイデンティ

ティー崩壊の危機に瀕していた俺は、精神、身体共にクタクタなんだよ……」

「そうですかー。残念ですねー」

ステラは残念そうにしながらも、きちんと俺の意見を汲み取ってくれた。そして、彼女がテストの代わりにある書類の束を持ってきた。

「これは？」

「メタモ君のマニュアルなのですよー。一応、作成しておきましたー」

受け取りパラパラと捲ると、メタモ君についての様々な説明が書かれていた。その中には例の『認証システム』についても触れられていた。

「あーそれですかー？ それは一種の安全装置のような物ですー。櫛野さん以外の方が使用できないように、付けておきましたー」

安心してください。あのチクツとした痛みは、初回登録時だけですからーとステラ。

ステラ曰く。今度から使う時は、ただ装着してボタンを押すだけで良いのだそうだ。

というか、こんなマニュアルがあるなら最初に渡せよ。

「それじゃーつまらないじゃないですかー？」

「じゃないですかー？ じゃねえよ！ 俺で遊ぶな っ！」

「遊びは人類の英知。人類は生命維持に関係のない『それ』を求めたために、繁栄を築けたのですよー」

人類の繁栄とは大きく出やがった。そもそも、ただの個人的趣味を人類繁栄の歴史と同記号で見ると。オランダの歴史家が泣くぞ。

「ところで 櫛野君」

「ん？」

俺を呼んだのは藤宮さんだ。俺がこのアホの娘の相手をするという、苦行に同情でもしてくれたのだろうか？

「いつまでその格好で居るつもり？もしかして気に入ったのかしら？」

しかしそんな俺の考えとは裏腹に、藤宮さんが捉えているのは俺の服。俺が視線を下ろすとそこにはスカートから伸びる俺の脚……。それは実に筋肉質で褐色系の。

「うわっ！忘れてた……」

さっきから足元が妙にスースーするなと感じていたら、そういえば俺が、女物の制服を着たままだった事をすっかり忘れていた。さっきまでは女の姿だったから良かったものの、今は完全完璧に男の姿。やっぱり気色が悪いな。

「今から学院へ行くやる気を見せなくても、明日からは嫌でも着る事になるのだから」

「いや、だから気に入ってねえ　って、明日　っ!？」

そうよと藤宮さん。何か問題でも？　といった顔をしていらっしやいますが、そりゃあ、問題だらけですよ。学校の手続きとか、学費とか、俺の心の準備とか。

「手続き、学費等は私達　藤宮家が何とかするし。あなたが危惧していた外見上の問題は、ステラのおかげで解決した。それとあなたに拒否権は無い。私の所有物の時点で」

「いえ……ですから、俺の　あなた様の所有物の心の整理期間を……」

「却下。正当な理由として扱えない」

ばっさりだああ　っ！　間髪を容れない却下宣言。あまりの素早い判断に、一層の清々しさを感じたほどだ。

こうして、文字通り女装　女の姿に見える装備を手にした俺は、この女の策略により、南川女学院というダンジョンへと挑戦する事が決まった。

俺が歩む世界はどこで歪曲を始めたのか、誰か教えてほしいものだ。

ちなみに。

「夏月さん、夏月さん。櫛野さんにー。変身前から女装する必要はないって、教えなくて良いんですかー」

「……そうね。もう少し後で良いわ。まあ『男の姿の櫛野君に女装

させる』という、当初の計画が成功したから、もう教えてあげても良いのだけれどね」

これは後でステラから聞いた事だが、メタモ君には変身と同時に制服へとチェンジする機能も搭載されているため、事前に制服を着ておく必要はないのだそうだ。

要は俺が化粧までする必要も、オーダーメイドの制服を用意する必要もなかったわけだ。

「ああ？ どうなってんだこれ？ スカートのチャックは……あつ、横か」

「面白そうだから、もう少しほっておきましょう」

「そうですねー」

そしてこの後。

俺がその事を聞かされ、疲れが当社比二倍どころか、三倍にも四倍にもなった事は言うまでも無い。

第四話 歩と始まる学校生活

翌日。こうして、南川女学院への転校というカードを手に入れたわけだが。

「ねえねえ、櫛野さん。好きなドラマとかある？ 私はねえ」

「そうであ！ 近くに美味しいケーキを、出してくれるお店があるんだけど」

転校初日。未だに俺の周りには女子、女子、女子。右を見ても女子。左を見ても女子。上を見ても うん。さすがに天井には存在しなかった。そりゃそうか、忍者じゃねえんだから。

つまるところ、冒頭に続く質問攻めが続いていたのだった。しかし、女が三人寄れば姦しいと言うが、本当によくもまあ、こんなにも話題が次から次へと出るもんだな。マシンガントークはこの事か？ いや、少し違う気がする。

「そうそう。櫛野さんって、藤宮さんの親戚なんだよね？」

「ええ っ！ そうなのお！」

ある女子生徒の言葉に、周囲の面々が驚きの反応を見せる。

「あつ、うん。俺 じゃなかった、アタシと藤宮さ じゃなくて、夏月はそうだよ」

俺の同意に周囲は更に沸いた。俺のたどたどしい言葉も、藤宮さんと親戚だという事の方が重要だったらしく、誰も気にした様子は

見せなかった。

俺と藤宮さんが親戚。これは藤宮さんとの間で交わした取り決めだ。

昨夜。それは藤宮さんの一言から決まった。

「櫛野君。あなたは私の遠い親戚という事にするわ」

「へっ？ 何で？」

俺がそんな間抜け面を晒すと、藤宮さんは呆れ顔を俺に向けてきた。

「分からない？ あなたの新しい戸籍や住民票、その他重要書類等が必要だからよ」

「新しい戸籍？ 住民票？ 今のじゃダメなのか？」

「ダメに決まっているじゃない。あなたは明日から南川女学院に通うのよ。女の姿で」

あつ……と俺の声が響く。完全に失念していた。いくら外見上の問題や学費、転校条件をパスしていようと、学校に通うには必要書類がある。それは転校以外にも、日常生活においても必要となってくるはずだ。

そして、藤宮さんの言う通り、俺はこれから南川女学院に通学しなければならぬ。そうなれば例え俺の戸籍や住民票、その他の書類があつても、それは『男の姿』の書類となるため使用する事ができないのだ。

「そういう事。でも、安心して『女の姿』の書類は、私達がきちんと用意するから」

「そっか。それなら安心　って、ちょっと待て」

「何かしら？」

書類関連を用意してくれる事はありがたい。しかし、何かスルーしてはいけない事があるような気がする。新しい書類。新しい……戸籍！？

「ちよいと藤宮さん？　新しい戸籍なんて、そんなに簡単に作れませんかよね？」

「ええ、そうね。作れないわよ　普通なら」

「……………。普通……………なら？」

何だろう。俺は今踏み込んではない領域に、足を突っ込んでいる気がする。いわゆる社会の裏側　闇の部分を感じ込んだ感じ。

「……………。聞きたい？」

「いえ、謹んで辞退させていただきます！」

興味はある。だが、死にたくない。これが心理だった。闇を知って死の鬼ごっこを繰り返すのは、漫画や映画の中だけで良い。少なくとも俺はごめんだ。

「……………賢明ね。それと、私の事は夏月と呼び捨てにしない」

「ん？ 藤宮さんじゃダメなの？」

「親戚同士なのに、苗字で呼び合うのは変でしょ？ 私も歩って呼ぶから」

女の子と名前で呼び合う関係。この時、密かにガッツポーズを取った事は秘密だ。

とまあ昨夜、藤宮さん改め、夏月と晴れて親戚同士となったわけだ。

「なんか榊野さんって、男っばいというか　ボーイッシュな感じだよな」

「ちよつと！　いきなり失礼じゃん。ごめんね、榊野さん」

「別に良いよ。よく言われる事だから」

ある女子生徒の言葉に、その子の友達らしき子がフォローを入れてくれた。俺としては気にする事でもなかったため、そう返す。そもそも男っばいではなく、男そのものだからな。

ちなみに俺は、一人称を「俺」から「アタシ」に変える以外は、一切女らしい仕草をしていない。まあ、やれと言われてもできないわけだが。

それはステラの助言に因るところが大きかった。

昨夜。短い間であったが、ステラの『女性について』の講義を聴かされる事になった。それによるとこうだ。

「良いですかー榊野さん。無理に女らしさを、演じる必要はありません

せんよー。というか、むしろー。てめえには一生掛かっても無理だから諦めやがれーみたいなー？」

「女装すんのに、女っぽくしなくて良いのか？ つうーか、喧嘩売ってんのか。てめえ」

いやーん。櫛野さん怖いーとステラ。怖がっているというよりは完全に俺で遊んでいやがるこのエセメイド。本気ではたき倒してやるうか。

「こほん、それはともかくー。そもそも女らしさなんて、一朝一夕で身に付くようなものではないのですよー。女形の役者さんだって何年も修行するのですからー」

それは男らしさも同様ですよーとステラ。なるほど、確かにそうだ。人にはそれぞれアイデンティティーというものが存在する。それはその人が何者であるか、またどう生きていくかを表すものであるため、そう簡単に変える事は難しい。

結局のところ俺が『女らしく』振舞ったところで、それは『らしい』だけであり、演技の域を出る事はないのだ。

「それにすねー。これから櫛野さんが通うのは女子校。言うなれば、女らしさを磨いて十数年！ の強者ばかりですからねー。櫛野さんのような青二才では、太刀打ちできませんよー」

「確かにそうだが、お前に言われるとなんか腹立つな」

「もーう、そんなに怒らないでくださいよー。そんなに端整じゃない顔が、更に端整じゃなくなりますよー」

ああ？ と睨むが、ただキヤーと黄色い声が響くだけ。このエセメイド。俺の真の恐ろしさを味わいたいらしいな。しかしエセメイドは、

「あつ、言い忘れてましたけどー。一人称ぐらいは『私』や『アタシ』に変えておいてくださいねー？ 個人的には俺っ娘も好きなんですけどー。現実にはそぐわないのでー」と冷静にスルー。かと思いきや、

「というか、真の恐ろしさって何ですかー？ 思春期特有の俺強えー的な妄想ですかー？」などとしつかりカウンター。この後、俺VSステラ戦争が勃発した事は言うまでもない。

ステラの講義は為になつたわけだが、それ以上に疲労感が押し寄せる大変なものだった。

「あつ、もうこんな時間！ 櫛野さんまたね！」

一人の女子生徒の言葉に反応する様に、慌しく自分の席へと着き始める女子達。何かと時計を確認すれば、一時限目の授業が間もなく開始される時間となっていた。

これにて質問タイム終了。それは何だか祭りの後の様で。一抹の寂しさがあるな……。

「どうしたの？ 歩。まるで役立たずのザコモンスターが、仲間にして欲しそうに見つめてきたような顔して」

「どんな顔だよ っ！ アメーバ状で、水滴のような形をしたアイツの事か？ つうーか、ナメんなよ。灼熱の炎で下克上すんぞ！」

俺の隣の席へとご光臨したのは、先日より呼び捨ての許しが出た

藤宮 夏月。

隣の席へとなった理由は、親戚同士の方が何かと助けになるでしょうと、担任の先生が配慮してくれた結果だった。質問攻めからは助けてくれなかったけどな。

「人気者みたいで良いじゃない。それに無理矢理止めさせて、皆の恨みを買うのは嫌よ。私は」

「他人事だな……完全に。しかし、なるほど一理ある。言うなればアレは簡易ハーレム！ 恨みを買うよりは、困んでしっぽりムフフと」

「……ねえ、あなた。何か知らないけど、女装してから怖い者知らずになってない？」

そうかな？ と俺。確かに淡白ではなくなったというか、羞恥心が鍛えられたというか、ともかく、何か色んなものを吹っ切ってしまっただけがある。

「私が言うのも何だけど。その吹っ切ったもの、取り戻した方が良いと思うわよ。後々の事を考えて」

「良いよ、別に。第一取り戻し方なんて分かんないし」

「それはそうだけど、良くはないでしょう……」

はあとため息をつく夏月。何だか知らないけど、この娘に一矢報いた気がする。

「そんな事よりさ。この学校ってお嬢様学校なんだよね？」

「そんな事って、まあ……良いわ」

まだ何か言いたげな夏月だったが、ちゃんと俺の質問には答えてくれた。

「お嬢様学校　ねえ。まあ、名のある家柄の子も多く通っているし、そういう意味ではそうね」

「なーんか、俺　いや、アタシの持っていたイメージとこう、何ていうかー。違うというかー」

「イメージと違う？　例えば？」

問いかける夏月に俺はイメージを言葉に変える。ついでに手の甲を左頬に当てながら、

「おーほっほっほ。跪けですわ！　愚民共　っ！　みたいな？」と口にする。

「……………。どんなイメージよ、それ。悪の女魔導士か何かじゃないんだから」

「うーん。後はリアルにごきげんようとか、言ってそんなイメージ？」

ずいぶんと時代錯誤なイメージねと夏月。時代錯誤。そう何だろうか？　いまいちピンと来なかった。大体お金持ちが通うような学校にも、そんな知り合いにも縁の無かった俺には、物語に出てくるようなイメージしか湧きようがない。

「私も、この学校の全員と顔見知りというわけではないから、はっきりとそんな人が居ないとは言えないけど。少なくとも私の知っている中で、語尾に『ですわ』や挨拶に『ごきげんよう』を用いる人は見た事がないわね」

「なにい　っ！」

そこで俺はシヨックを表すように大きく仰け反った。何事かと夏月は不思議そうな顔をする。

「じゃあ、先輩の事をお姉さまって呼んだりは！」

「ないわね。普通に名前の後に先輩を付けるだけ。先輩って感じに」

「じゃあ、タイが曲がっていてよとお姉さまに呼び止められる事は！」

「だから、お姉さまなんて呼ばないって。他人のタイなんて誰も気にしないわよ」

「じゃあ、マリア様が見ている事は！」

「さあ？ 私の家は無宗教だから分からないけど、信仰心の厚い人の事はきちんと見ているのではないかしら？　というか、今の質問だけおかしくない？」

「ガッデエエエ　ムっ！」

さつきから何なのよと夏月。ショックを受ける俺に反するように、夏月は冷めた反応を見せる。なぜ、夏月は何も思わないんだ？ それじゃあ、普通の女子高ではないか！

「……あなた、どこかで頭に致命的なダメージでも負ったの？ 普通の女子高って、言っている意味がまるで分からないわ」

「意味なんてどうでも良い！ この学校には、この学校にはっ！ 圧倒的にロマンが足りない！」

「どうでも良いって、あなたが言い出したんじゃない。それにロマンが足りないなんて、ステラみたいな事を言わないで」

やっぱり、女装がいけなかったのかしら？ と本気で悩み始める夏月。だが俺は、直面した現実という名の壁にショックを受けるばかりで、それに構ってはいられない。

あががと言葉にならないうめき声を上げ始めた俺だったが、

「よし、授業始めつぞ。お前ら席に着け　って、もう着いてるか。いや、ここの生徒は真面目で良いわ」

とどこかやる気の欠けた女性教諭が、教室に入って来た事で納まった。騒いでいた他の生徒も同様に静かになる。

「ほら、シャキッとしなさい。人間第一印象が肝心よ」

「あーっー」

俺は打ち砕かれた理想に敬礼を送り、重たい体を持ち上げる。確かに夏月の言う通り第一印象は肝心だ。しかも、俺がこの学校で受

ける最初の授業ともなればなお更の事。

「んじゃ、改めて。授業開始」

女性教諭の言葉と共に始業のチャイムが鳴る。こうして、俺の南川女学院による生活が本格的に始まったのだった。

言語の日。南川女学院には、週に一日生徒からそう呼ばれている日があった。

言語分野の授業が集中している日。略して、言語の日なのだそうだ。

「独、英、仏、西、露、国」

つまり転校初日。俺が遭遇したのが、その言語の日だった。ちなみに俺が口に行っているのは呪文か何かではなく、今日の時間割だったりする。

現在は上から四つの授業が終わり、昼休みの真っ最中だったりするのだが、俺は敗残兵宜しく疲労感と絶望感に苛まれていた。

「あら？ どうしたの歩。口から魂が出掛かっているわよ」

「ああーそうかー。なら、取り戻さないとなー」

俺を覗き込むように話し掛けてきたのは、例のごとく藤宮 夏月。彼女は俺の適当な返答に、不満そうな顔を向ける。

「もう、ノリの悪い人ね。なに、そんなに疲れたの？」

「ああ。もう、天と地がひっくり返るぐらい」

それは驚いた時の表現でしょうと夏月。確かにそうだが、ニユアンスとしては伝わって欲しい今日この頃。夏月はどうお過ごしでしょうか。

「至って元気よ。あなたほど消耗してはいないし」

「……だって、しょうがねえだろう。俺　アタシは、普通の……
一般校からの転校なんだから」

ここに来て初めて聞いたが、どうやらこの南川女学院には、他の学校を『一般校』と呼ぶ風潮というか、独特の雰囲気というかそんなものがあつた。

それは南川女学院が他の学校とは、少し違う教育形態を採っているからか、それとも『一般校』と『南川女学院』とでは、格が違うという一種の自尊心から来るものかは分からない。

ただ、ここでは他の学校をそう呼んでいる。だから俺もそれに倣ってみたのだが、どうも落ち着かない。

「そっか。歩が前に居た学校は、英語以外の外国語を扱っていなかったのだったわね」

ただ、夏月だけはそういった雰囲気が無かった。俺の前だから気を使ってくれているだけなのかもしれないが、俺としてはそれがありがたかった。

「とというか、それが普通だと思うぞ。第一英語だけでも手一杯なのに、ドイツ語やフランス語まで手が回らねえよ」

「普通、ね……。でも歩、午前中の授業は難無くこなしていたじゃない。学校で習ったのでなければ、どこで覚えたの？」

実は帰国子女だったとか？ と夏月。彼女は午前中の授業を思い出すような仕草を見せる。

「ねえよ、そんな経験。大体そんな事、俺の アタシの事を調べた時に分かっていた事だろう」

それもそうねと夏月。俺は疑問を持った顔をしている夏月に、自分の首に付いているチョーカーを指差して見せた。

「バイリンガル機能。正確には、ポリグロット機能とか言うらしいんだけど。要はこいつにインプットしてある言語なら、翻訳できるんだと」

ちなみにこの機能に気付いたのは一時限目のドイツ語。英語に近い言語だとはいえ、触れた事もない文化圏の言葉がスラスラと頭に浮かんできた時は、驚きよりも恐怖を覚えた。

その後、マニュアルでその機能を確認した時の安堵感といったらもう。一瞬、前世での記憶が蘇ったのではないかと思っただくらいだしな。

ステラ曰く、

『頭の弱 基、知識が乏し 基、極一般の歩さんが、勉強について行ける様に追加しておきました』との事らしい。

そうマニュアルに書いてあった。アイツ、帰ったらさせてえ引っ叩く。

「なにそれ。卑怯くさいわね」

「卑怯って言われてもなあ、付けたの俺じゃないし。それに欲しければ、ステラに頼めば良いじゃないか」

夏月は俺の言葉に考える素振りを見せた。だがそれも数秒の事で、すぐに俺の方へと視線を向け直す。

「確かに楽そうだけど、私には必要無いわ。知識は自分で得るからこそ意味があるんだから」

「そっか。まあ、確かにそれが正しいよな」

「でも、別にそれを否定するわけじゃないわよ。自分ではできない事を他のツールで補う事は悪い事ではないし」

私も科学方面はステラに任せてあるからと夏月。しかし彼女の場合は、できない俺と違って効率の問題を視野に入れた結果なのだろう。やはり将来『藤宮エレクトロニクス』を背負っていく彼女とは、考え方そのものが俺とは違う気がした。

などと夏月に感心している。

藤宮さんとクラスメイトが夏月を呼ぶ声が聞えて来た。彼女は声の主へと近づくと、一言二言の会話をこなす。そして、すぐに俺の元へと帰ってきた。

「ごめんなさい、歩。なんか先生が呼んでいるみたいだから、ちょっと行ってくるわね」

「呼び出し？ 何の？」

「さあ？ 心当たりはないけど」

夏月は俺にそう答えると急いで教室から出て行く。しかし教室を出る直前、何かを思い出したように俺のところへ戻って来た。

「歩、お昼まだでしょ？ 先に食堂へ行っておいで」

「食堂？ 俺 アタシ、場所なんて知ら って、おいっ！ 夏月！」

夏月はそう言うと、早々に教室を出て行ってしまった。何という無責任さだ。

「……まったく」

俺は夏月の去った方へと恨めしい視線を送ったが、それで何か解決するわけでもなく、すぐに視線を元に戻す。まあ、とりあえず。

移動するか。そう思った時だった。

「あの、櫛野さん？」

俺の前方からそんな声が聞えて来る。そこへ顔を向けると、そこには一人の生徒が立っていた。

グリーンブラウンの目に、ウェーブがかかった亜麻色の髪。小柄な体躯に、どこかほんわかとした雰囲気特徴的な女の子。どうやら異国の血が混ざった娘のようだった。

「えっと、君は……？」

「あつ、申し遅れました。私、姫島いちごと申します」

以後お見知り置きをと姫島さん。何だか訊いたらエライ丁寧に教えてくれた。俺の事を所有物だとか言った女に、聞かせてやりたいくらいだ。

しかも『お見知り置きを』なんて事を、自然に口にできる人間なんて初めて見たぞ。

「いえいえ、そんな事ありませんよ」

しかも、謙虚だ。マジで見習え、夏月お嬢よ。

などと、愚痴を零している場合ではなかった。俺も名乗らなければ。

「こほん。アタシは櫛野 歩。えっと、よろしく」

「ええ。存じ上げております」

そりゃそうか。今朝クラスメイトの前で自己紹介したばかりだからな。とりあえず一人称を間違えなかった俺グツジョブ。

「それで、アタシに何か用事かな？」

「いえ、用事というか……。何かお困りの様でしたので、挨拶も兼ねてお声を掛けさせてもらいました。ご迷惑でしたか？」

そう言う姫島さんは、本当に申し訳なさそうな顔をしていた。しまった。せつかくの姫島さんの厚意を無下に扱ってしまった。俺は慌ててそれを否定する。

「いやいや、迷惑なんてとんでもない！ ちょうど食堂の場所が分からなかったとこなんだ！」

「そうでしたか。では、宜しければご案内致しますよ？」

「本当に？ ありがとう、助かるよ！」

いえいえと姫島さん。それから俺は、姫島さんに食堂まで案内してもらった。姫島さんは本当に親切で、食堂に行く途中に見かける各教室の説明もしてくれた。

「姫島さんって、いつもこんなに親切なの？」

「親切なんてそんな。ただ、私が余計なお節介を皆さんにしているだけですよ」

「余計じゃないよ。少なくともアタシは感謝してるよ」

姫島さんは照れた様に笑う。そのはにかんだ笑顔は素敵なものだった。やっぱり笑顔の素敵な女の子は可愛いよね。

「そっいえば姫島さん。何で敬語なの？ 同級生なのに？」俺がそう訊くと、

「すみません。普段からこの言葉使いなので……。不愉快でしたか？」と、

またしても謝られてしまった。どこまでも丁寧な人だな。

食堂に着くと、そこにはお昼を食べようと集まった生徒で溢れていた。これは席の確保が大変そうだ。

「そうだ。姫島さんも一緒にどうぞ?」

俺は案内してくれたお礼も兼ねてそう切り出したが、

「お誘いありがとうございます。ですが、すみません。先約がありますので」と、

断られてしまった。まあ、当たり前か。突然誘った俺が悪いわけだからな。

「では、私はこれで失礼します」

「ありがとう! 助かったよ」

俺の言葉に笑顔で応えた姫島さんは颯爽と去って行った。俺はそれを見送ると、席の確保に食堂の中へと向かった。

それは櫛野 歩が食堂へと入っていた後の事。廊下を歩いていた姫島いちごの横には、いつのまにか三、四人の生徒が付いて歩いていた。

「ねえ? あの劣校インフェリアどうだった?」と、

一人の生徒が声を出す。それは姫島いちごに対して掛けられた声だった。

「別に。あの藤宮にお似合いの馬鹿面だったわ。私は親切な人らしいわよ?」

姫島いちこの発言に、周りに居た生徒がクスクスと笑う。それはどれも人を嘲るような笑い方だった。言った本人の姫島いちごも例外ではない。

いやむしろこの少女が、一番歪んだ笑い方をしているのかもしれない。そこには数分前の彼女とは、似ても似つかない雰囲気を持った姫島いちこの姿があった。

「ねえねえ。それでえ、これからどうすんのぉ？」

「そうね……。いつも通りやってちょうだい」

「あっー。マジで？ いちごってば、ホント容赦ないよね」

このメンバーは姫島いちごを中心に動いていた。それは現状を見れば分かる事だが、それを知る者は校内には少ない。それは姫島いちこの根回しの良さのおかげだった。

「ホントあの劣校、かわいそぉ。同情しちゃうよぉ」

「とか言って、アンタがいつも一番ノリノリじゃん」

「あっ、バレた？」

あははとさも愉快そうに笑う彼女達。しかしそれも姫島いちごが口を開けば、皆が皆その話に耳を傾ける。統率力に長けた姫島いちご。彼女の言葉がこの場に響く。

「まあ、そういう事だから。よろしくね、みんな」

言葉のそれが指す意味までもは分からないが、それは彼女達の『

標的』に災難が襲い掛かる事を示唆する言葉だった。

第五話 歩が知った犬猿の仲

食堂にて、テラスに設けられたテーブル席を確保して数分。

待ち人 夏月は、俺のところへと歩いて来ると、開口一番にため息をついた。

「はあ……。あなた、何でこんな隅の方の席を陣取っているの？」

「何でって、今日は天気も良いし、そもそも他の席が空いてなかったんだよ」

第一、人に席を確保させといて、文句を言うとは何事か。そう夏月に言つと、

「そうね。ごめんなさい」と意外にも素直に謝られた。

「あれ？ てつきり、反論されるものだと思つたが、どうしたんだ？」

「どうもしないわ。少しイライラする事があって、気が立ってるみたい」

夏月はそう言つと俺の対面の席へと座る。確かに本人の言つ通り、夏月はどこかイライラつきを覚えているようだった。

「……先生に何か言われたのか？」

俺は夏月が呼び出しをされていた事を思い出しそう口にした。だが、夏月は首を横に振る。

「いいえ、先生からは、早急に出して欲しい書類があると言われただけだったわ」

「じゃあ、何で？」と俺が訊くと、

「別に。私の嫌いな人間に会っただけよ」と冷たく言われてしまった。

しかし、夏月がイライラしているところなんて初めて見た。いつもは俺をイジメるか、俺を見て呆れるかのどっちかだったからな。相当ソイツの事が嫌いなんだな。

グウ……。

そう思っていると、そんな音が聞こえてきた。それは腹の虫が喚きだした音だが、しかしそれは俺から出た音では無かった。

となると、後は自動的に、俺の対面に座る夏月が音の主という事になる。しかし、ここで騒ぎ立てれば夏月が恥を掻く事は必須。いくら彼女が冷酷非道でも、性格が螺旋のように捻じ曲がっていても、悪魔と呼んだ方がしっくりくる人物であっても、相手は女の子なのだから。

やべえ。俺、スーパー紳士。

「……あなたが、どんな失礼な事を考えているかは知らないけど、今の音は私では無いわよ」

「そうだなあ。分かっている分かってる。お兄さんは全て分かっているぞお」

「私、気が立っていると今さっき言ったわよね？ ……殺すわよ？」

あるえ？ まさか、まさかの死の宣告。おかしいな？ 俺のフオロ―は完璧だったはず。これはもう、未だ見ぬ宇宙生命体の介入が原因なのではないだろうか？

「ねえよ。てめえの脳に電極ぶつ刺して、宇宙と交信させてやるるか？」

「わお。夏月さんがいつにも増してバイオレンス」

口調が変わるほど怒りの様子の夏月さん。これ以上やると、俺の命が宇宙のお星様になりかねないのでこの辺でストップ。じゃあ、あの音は誰だったのかな？

「ふっふっふ。それには私が答えよう！」

俺の疑問に答える様に一人の少女が突然生えてきた。というのも、俺達の横。正確には座っているテーブルの右横下から、湧き上がるように少女が出てきたからだ。

セミショート的茶髪に明るく元気そうな瞳。スレンダーな体形に若干日に焼けた肌が、スポーツ少女という言葉を連想させる、そんな少女だった。

そんなスポーツ少女は、不適な笑みを浮かべると、

「お困りの様だね。明智君！」となぜか得意げだった。

「……困ってない。帰れ」

「ちよ、ちよっと！ 今の酷くない！？ なっちゃんのいけずう〜」

そう言いながら夏月に飛び付く少女。というか、なっちゃんって

夏月の事が。

「瑠希。毎回私に抱き付くのは、止めてって言うているでしょう？」

文句を言いながらも夏月はなすがまま、瑠希と呼ばれた少女に抱き付かれ続けている。扱いは酷いが、仲自体は悪くないのかもしれない。

「ところで、音の正体を説明してくれるんじゃないの？」と俺が訊くと、

「おおっ！ 何だかこちらの淑女さんが拾い直してくれた！」と少女が嬉しそうに言った。

少女は夏月に抱き付いた手を離すと俺に近づく。その顔は、さっきの得意げな顔に戻っていた。それと俺　アタシは淑女じゃなくてスーパー紳士だ。

「すーぱー？ タイムセールにはまだ早いと思うよ？ そんな事よ……」

少女はこほんと咳払いをすると、指を顎に当て、まるで名探偵が推理をする時の様な仕草を見せる。しかし、なぜかこの少女がするとコントの一部にしか見えない。

「……良いかね、明智君。事件が起きたのは昼。この陽光差すテラスで」

「犯人は瑠希。はい、証明終了」

「がーん！ ひ、酷い！ これから七つの海を巡る壮大かつ、スペ

クタクルな推理ショーが始まるところだったのにいー」

「始まらなくて良いわよ、そんなの。永久に未公開でけっこう」

夏月の雑な扱いに「うわーん」と、今度は俺に向かって飛び付いて来た少女。

イエス！ 何という役得！

「あなた……。もうそういうキャラで行くのね。良いわよ。私は止めないから」

「ふむ。そういうキャラとは何の事かな？ 夏月君」

「言葉通りよ。櫛野 変態。いや、変態 歩かしら？」

なるほど。どっちに収束しても、結末は変態である。これは巧妙に仕組みられた変態トラップというわけですね。夏月さん。

「あなたはこういう事に対して、もう耐性ができてしまっているのね。色んな意味で残念だわ」

本当に残念にそうため息をつく夏月。ふふーん。そんなに褒めないでくれよ。

「あの一。それはそうと、そろそろ私名乗っても良い？」

俺がやたらと不健全な事で胸を張っていると、俺に抱き付いていた少女からそんな声が上がった。それは夏月に向けられた言葉だった。

「ああ、そういえばまだだったわね。紹介するわ。この娘は幸坂瑠希」

夏月の言葉に反応するように少女は俺から離れると、ちょうどテーブルの中間地点に立つ。

「どもー。ご紹介に与った幸坂 瑠希でえーす。趣味は……えっと、何だろうか？ まあ、お菓子作り？ で良いや。よろしくー」

「……おいおい。自分から希望したわりには、適当な自己紹介だな。『で良いや』とか、言っちゃったよ。この娘」

俺がこの少女改め、幸坂さんの適当さに衝撃を受けている間に、夏月によって俺の紹介が行われていた。俺も一応、自分の口で名乗る。

「そっか。櫛野 歩……あゆちゃんね！ よろしくー」

「いや、あゆちゃんって、アタシの事か？」と俺が訊くと、
「そうそう。そっちの方が何というかあ。可愛いじゃん？」と満面の笑みで答えられた。

そうか？ と訊いても、そうだよ！ としか返ってこなかった。
夏月の『なつちゃん』といい俺の『あゆちゃん』といい、幸坂さんは人をちゃん付けで呼ぶのが好きなのかもしれない。

「 自己紹介中悪いけど、時間だいぶ過ぎているわよ」

「えっ？ 時間？」

夏月の言葉に反応する様に時計を見ると、秒針が午後の授業が迫っている事を示していた。

「うわぁ！ 嘘、アタシまだ何も食べてないぞ！」

しかし、それは夏月や幸坂さんも同じはずと、同族意識を持つていたら、

「私にはこれがあるから」

「右に同じく」と二人が手にしていたのは、スティック状の栄養調整食品。

確かチーズ味やチョコレート味など、味のバリエーションにとんだ人気商品で、価格も安いと女性に好評だとか。つうーか、お前らそれだけで足りるのかよ？

「足りないわ」

予想外にもあっさりと肯定された。

二人曰く、空腹を満たす事が目的ではなく、午後の授業中にお腹の音が鳴らないように、調整できればそれで良いのだそうだ。それって、食事の意味合いが違ってこないか？

「意味なんて状況や人によって変化するものよ。それよりも、ほら、早く行くわよ」

「ああ………待って。アタシの昼飯！ 昼飯があああ！」

俺の発言空しく、夏月は俺の襟首を引っ張りながら連れて行く。後には幸坂さんが苦笑いをしながら付いてくるが、どうやら助けて

はくれないようだ。

こうして俺は空腹のまま、食堂を後にした。

「アタシの……昼飯……」

「まだ言っているの？　しょうがないでしょ。時間が無いのだから」
食堂から教室へと向かう途中の廊下。俺達は急ぎ足で歩いていた。

「あはは。ほら、あゆちゃん。私のお菓子を少しあげるから」

「うう……。ありがとう、幸坂さん」

それは天使の施しのようで、俺にとって今のあなたは女神のようです。あっ、夏月は悪魔か魔王が妥当　嘘です。ごめんなさい。
夏月さんこそ真の女神です！　だから殺さないでえ。

「　　はあ……。それより歩。一つ聞きたい事があるんだけど」

夏月は俺を視線で殺す事を中止すると、そう問いかけてきた。
何でござえましょう？　と俺はゴマすり全開で夏月に近づく。彼女は俺を、気味が悪いものでも見る様な目で見つめる。失礼な人です、すね、まったく。

「　　……あなたが、そんな事をするからでしょう。それより、食堂に来る時に誰かに案内してもらった？」

「案内？ 何でそんな事を訊くんだ？」

俺の疑問に夏月は「良いから答えなさい」と語気を強くする。どうやら夏月にとっては重要な事の様なので、俺も真面目に答える事にした。

「えっと、姫島さん……だっけ？ クラスメイトの。その人に案内してもらった」

「やっぱり……。」

俺がそう答えると、夏月の機嫌が目に見えて悪くなった。チツと舌打ちが、俺の耳へと届くほどに苛立っているようだ。急にどうしたんだ？

「……………。何でもないわ」と夏月が答えるが、どう見てもそうは見えなかった。

夏月は深呼吸を一回、自分を落ち着かせる様になると、俺に向き直った。

「……………良い、歩。今から言う事をよく聞いて。これは忠告じゃなくて警告よ」

「あ、ああ」と戸惑う俺に、夏月は真剣な表情で俺に近づくと、「姫島いちごに気をつけて」と一言。そう呟いた。

「えっ？ 気をつけろって、どういふことだよ？」

俺は疑問を夏月にぶつけてみるが、彼女はそれ以上、その話を話したくないと言わんばかりに俺から離れる。そして、
「あの女は、あなたが思っている様な人間じゃないから」と言うのと先に行ってしまった。

「あつ。お、おい！ 夏月！」

俺の制止の言葉など聞こえていないかの様に、歩を進める。あつという間にその姿は廊下の角に消えた。残されたのは一人戸惑う俺と幸坂さんだけだ。

「たはは。なっちゃんも相変わらずだね」

見ると幸坂さんは、廊下に消える夏月を苦笑いしながら見つめていた。相変わらずとは？

「見ての通り、なっちゃんと姫島さんって、仲が悪いんだよ」

幸坂さん曰く、夏月と姫島さんは南川女学院・初等部からの犬猿の仲で、普段は表に出さないが、夏月は相当姫島さんの事を嫌っているのだそうだ。

「という事は、夏月の嫌いな人間っていうのは、姫島さんの事？」

「うん、そういう事になるね」

夏月は俺に『気をつける』と言ったが、俺には、どうも姫島さんがそんな人には見えなかった。あんな親切な人なのに。その旨を幸坂さんに伝えると、

「うーん、そうだね。私も別段何かされたってわけじゃないし、一概に悪とは言えないよね」

幸坂さんはそう答えてくれた。しかし、最後にスツと目を細めると、

「だからと言って、悪の裏側が、必ずしも善とは限らないけどと付け加えた。

「えっ？ それってどういう……？」

俺が訊き返しても、幸坂さんは、
「気にしないで。ただの個人的主観だから」と苦笑するだけだった。

その後、授業開始のチャイムにより、この話題は強制的に打ち切られた。

俺は幸坂さんと廊下を走る中、夏月の警告と幸坂さんの言葉を反芻する。

『 姫島いちごに気をつける』
『 必ずしも善とは限らない』

これはもう一度『姫島いちご』という人間を見極める必要がある。
俺はそう思い直した。

第六話 歩が関わる人間関係

放課後。午後の授業が終了し、俺は帰宅の準備をしていた。

教室は一日の授業が終わったせいか、開放的な空気に包まれており、これから部活に行く者や町へ遊びに繰り出す者など様々だ。

「はあ……」

俺はそんなクラスメイトの様子を、ため息をつきながら見つめる。まあといっても、もうそのほとんどが教室を後にしている状態なのだ。あつ、また一人出て行った。

実をいうとクラスの娘に、遊びのお誘いなどを掛けてもらったのだが、

「ごめんなさい。歩はウチの用事で遊ぶ事ができないの」と夏月ストップ。

おかげで、俺の宇宙大革命計画『女の子との嬉し恥ずかし放課後デート!』は破綻。

おまけにクラスの娘も「藤宮さんがそう言うなら……」と変な気を回してくれて、この後、お誘いが掛かる可能性が、限りなくゼロに近くなったのは言うまでもないだろう。

しかもそのストップパー、夏月はといえば、隣のクラスである幸坂さんに用があるからと、俺を教室で待たせていた。アイツめ……。

「……どうかなさいましたか？ 櫛野さん」

俺を呼ぶ声が出したのは、そんな時だった。声をした方向へと顔を向けると、そこに立っていたのは、現在俺のホットな話題ランキン

グ暫定一位の『姫島いちご』さんだった。

「えっと、どう……とは？」

俺は彼女に気づかれぬように少し警戒の色を強くする。

「あつ、いえ。放課後になっても、机に座ったままなので、どうかなされたのかと思って」

姫島さんは微笑を浮かべながらそう口にする。単純に気に掛けてくれただけ？

「あつ。えっと、夏月の事を待ってるだけなんだ」

「………………。藤宮さん？」

俺が夏月の名前を口にした時、姫島さんに少しだけ様子の変化が見られた。幸坂さんの言う通り、夏月と仲が悪いと言うのは、あながち間違っではないようだ。

「そうそう。アイツってば、友達に用があるからって、アタシを待たせるんだよ」

「ふふ。でも、何だかんだ言いながらも、しっかり待っていてあげるんですね」

クスクスと笑う姫島さんは、夏月については触れなかった。

ここで夏月との仲を訊いてみるも良いが、はたして答えてくれるか？

そんな事を思っていると、

「あれえ？ 姫島じゃん。なにしてんのお〜」と妙に耳障りな声が聞こえてきた。

見るとそこには数人の女生徒が立っていた。数にして四、五人。明らかに人口的に染めた髪、耳に開けたピアス。元々、服装に関する校則があまり厳しくない南川女学院においても、別の意味で目立つ身なり。

耳障りな声は、その引つ掛かる様な喋り方から来ている事がすぐに分かった。

いわゆるファッションのやり方を履き違えた現代の女の子。そんな生徒が、

「なに、なにい？ 姫島に友達？ マジウケる！ まじめちゃんのくせに！」と笑った。

あはは、マジウケる！ と他の娘も笑った。何がそんなに可笑しいのかは知らないが、それが、姫島さんに向けられている悪意だという事はすぐに分かった。

「や、やめてください！ その、櫛野さんは……友達じゃありません！ から……」

姫島さんは俺を庇う様に立つと、震える声でそう言った。

「あはは、なにそれ？ や、やめてくださいい〜。どう？ 私、似てねえ？」

やべえ、超似てるう〜と盛り上がるメンバー。どうやらあの娘はこのメンバーでは、リーダー的存在なのだろう。

まあ、そんな事はどうでも良いか……。

「なあ？ あんた等、姫島さんに何か用でもあんのかよ？」

俺はそう口にするのと、自分の席から立ち上がり、その集団へと近づく。

「はあ？ 別にいく。つうーか、アンタには関係ないっしょ？ 友達じゃないんだしい？」

そう言っつて、ニヤニヤと姫島さんの顔を見るリーダー格の娘。姫島さんはその視線から逃れる様に顔を背けた。

「……そうだな。確かに友達じゃねえよ」

俺の言葉に姫島さんは傷ついた顔をしたが、それも一瞬。すぐに顔を伏せてしまった。

「だったら、邪魔しないでくれない？ アンタが居ると、姫島と遊べないんだけど？」

そう言っつて、俺の横を通り過ぎ様とした。だから俺は、それをエスコートする様に、

「えっ！ ぎゃっ！」

襟首を思いつきり引っ張っつてやった。

リーダー格の女の子は、予想外の力に悲鳴を上げながら、後ろ向きに倒れ込んだ。

「おっと、悪い。押す方向を間違えちゃった」

俺は悪びれた様子もなく、その女の子に対して笑う。俺の行動に、最初はキョトンしていたリーダー格の娘だったが、すぐにその表情を怒りに変えた。

「はあ！？ なにそれ、ありえない！ アンタ、何なのよ つ！」

キーンと甲高い声が教室に響く。相当にお怒りの様子のリーダー格。

「いや、何って言われてもなあ？ 櫛野 歩？ これで良い？」

「なにそれ！ バカにしてんの つ！」

俺の答えにリーダー格の娘は顔を真っ赤にして怒る。まあ、その通りなのですが。

「 つ！」

リーダー格の娘はしばらく怒り続けていたが、ふっと我に返る様に怒りが収まった。まるで何かに従う様に、スイッチが切り替わる。

「………………。つうーか、何でアンタ、ソイツを庇うの？ 関係ないじゃな」

…………庇う？ という事は、少なくとも自分達が、悪意のある行動をとっているという自覚はあるのか。まあ、理由としては。

「お前らが気に食わないから」

「……………はあ？」

俺の答えに啞然とするリーダーやメンバー。ついでに姫島さんも目を丸くしている。

「いや、よくさ。正義心とか親切心とかで、動くカッコいい主人公とか居るじゃん。アタシもそういう風に動いたらカッコいいな〜とか、思ったりするんだけど」

駄目なんだよなと、俺の声が教室に響く。

「どうもアタシには、他人事だと感じてしまうんだよ。ほっておけ。ソイツは所詮、自分には関係の無い人間だって……………」

何言ってるんだろうな、俺。どうしても良いじゃねえか、そんな事。さつさと結論を言えよ。

「……………まあ、だから、アタシは気に食わないお前等の邪魔をしているだけだよ」

「……………。けっ、なにそれ。バカじゃないの？」

俺の話を聞いていたリーダー格の娘は、そう吐き捨てる様に言った。まあ、俺も何を言ってるんだって感じなんだけどね。

「まあ、でも。気に食わないって点だけは、アンタと一緒にだわ」

そう言っただけで臨戦態勢になるリーダー格の娘。他のメンバーも同様

に身構える。

……さて、どうしようか。俺はジリジリと俺の方へ近づいてくる目の前の集団を見る。

数は全部で五人。いくら相手が女子とはいえ、多勢に無勢。こちらが不利なのは明らかだった。しかも俺ってば、啖呵切つといてなんだけど。

「とりあえずアンタはボコるから」

喧嘩の経験とか殆んどねえんだよなあ……。つうーか、お前から仮にも女子だろ？ そんなセリフを口にすんなよ。もっとお淑やかにしろ。こんなお嬢様学校に通ってたんだから。

しかし、そんな俺の心中がこの集団に伝わるはずもなく。俺の焦り指数が高まるばかりだ。

そんな時だった。

「……何をしているのかしら？ あなた達」

それは教室の入り口。長い黒髪を靡かせ、凜とした佇まい見せる一人の少女。

「聞こえなかった？ 私の身内に何をしているのかと訊いているのよ」

そう俺の所有者にして、冷酷非道の暴君マスター、藤宮 夏月の姿がそこにはあった。

「えっ！？ 藤宮 夏月……？」

俺を囲む集団は夏月の登場に焦りを見せていた。それはまるで予

想と違う出来事が起こったかのようなそんな焦り。

「ちょ、ちよっと、藤宮が来るなんて聞いてない!」

メンバーの一人がそんな事を漏らす。……聞いてない?

ヒソヒソと何かを口にし始めた彼女達。夏月は、そんな面々を睥睨する様に教室に入ってくると、彼女達の前で止まる。それはリーダー格の娘と睨み合うような形になった。

「なに、藤宮。アンタ、こいつの知り合いなの?」

リーダー格の娘は、俺を親指で指しながらそう言った。メンバーの中では、唯一焦りを見せず、一番落ち着いていたのも彼女だった。

「そうよ。歩　彼女は私の親戚。藤宮の一員よ」

藤宮の一員。その言葉に反応するように、リーダーを省く他メンバーが再び慌て始める。しかし、リーダー格の娘は依然として落ち着いていたまま。さすがと言えようか。

「はっ、偉そうに。そうやって藤宮って、権力を笠に着る事しかできなくせに」

「何とでも言いなさい。それが効果的なカードである限り、私は使う事を躊躇わないわ」

「……………」

両者の睨み合いは時間にして数十秒。先に折れたのはリーダー格の娘だった。

「あゝマジうぜえ。何か、超冷めた。もう良いや」

リーダー格の娘はそう言うと、俺や夏月から離れ、教室のドアへと向かう。他のメンバーも、それにゾロゾロと付き従うように歩いて行く。

リーダー格の娘は出て行く寸前、俺の方へと振り返ると、
「アンタの事覚えたから。覚悟しときな、劣校^{インフェリア}」と口にした。

インフェリア？ と俺が疑問を感じている間に、彼女達は教室から立ち去って行く。

教室には俺と夏月、そして姫島さんだけが残された。

「ふう……。ありがとう夏月、助かった。お前って、すげえんだな」
あんな集団相手に、夏月は一步も引かなかった。それどころか相手をけん制して、追っ払うとこまでいった。俺なんて何も考えずに事を荒立てただけだったし。

「別に気にしなくて良いわよ。最初から、あなたが揉め事で役に立つとは思っていないわ」

「お、おう。分かってはいても、心に突き刺さるねえ……。夏月さん」

俺は意気消沈しながらそう答え、夏月の方を向いたが、彼女は俺の方を見てはいなかった。

「……………」

夏月の視線の先、そこには姫島さんの姿があった。事が済み、ボ
ーとした様子の姫島さんとは対照的に、夏月の雰囲気は敵を前にし
た時のようだった。

「お、おい、夏月。その……姫島さんは違うぞ？　むしろ、彼女は
被害者というか」

「……歩は黙ってなさい」

夏月と姫島さんの関係を聞かされていた俺は、慌てて夏月に言う
が、彼女は有無を言わさない態度だ。ヤバイぞ。これは……。

「……姫島　いちご」

「あつ。えっと、はい！」

姫島さんは夏月に呼ばれ、ビクツと驚いたように反応した。そし
て、睨みを効かせている夏月を前に、慌てるように居住まいを正し
た。

「ご、ごめんなさい。私、ポーとしちゃって、せつかく助けて頂い
たのに……」

ありがとうございましたと頭を下げる姫島さん。しかし、夏月の
態度は軟化しない。

「あなたを助ける？　私が？　冗談でしょ。私が助けたのは彼女
櫛野　歩であって、あなたじゃないわ」

その言葉に親愛や情などは微塵も無く、あるのは純粹な敵意だけ。俺は人がここまで相手を嫌悪する姿を初めて見た気がした。

「……………ごめんなさい」

夏月に敵意を向けられた姫島さんは、顔を伏せ、少し怯えた様子を見せる。さすがにやり過ぎじゃねえか。俺がそう思っていると、
「……………。もう良いわ。行きましよう、歩」と夏月が俺の手を掴み歩き出す。

「お、おい、夏月！ 待ってって！ えっと、姫島さん。また明日、学校で！」

「あつ、はい！ 今日はありがとうございました！」

俺の言葉に何とか笑顔を作り、そう返してくれる姫島さん。小さく手も振ってくれた。

「……………」

そこでスツと夏月は歩みを止めると、姫島さんの方を振り向く。

「まさかとは思っけど、今回の事。あなたが仕掛けた事じゃないでしょうね？」

「仕掛ける？ えっと、ごめんなさい。ちょっと言っている意味が理解できなくて」

「……………。そう」

夏月はそれ以降、姫島さんの方を振り向く事はなかった。ただ、俺を引っ張る力を強くすると、早足に教室を後にした。

ただ一人、教室に残された姫島いちごは、椅子に腰掛けると足を組む。そこには少年に見せていた丁寧さも、少女に見せていた怯えも無かった。

「……………チツ」

姫島いちごを除いた無人の教室に舌打ちの音が響く。隠す様子も無くただ苛立たしげに。

「急いては事を為損じる。じっくり行こうと思ったけど、やっぱり止めた」

それは誰かに向けた言葉なのか、はたまた一人語りなのかは分からない。

「悠長に構えたところで、あいつ等が消えてくれるわけじゃないしね」

ただ、窓に映る彼女の顔は、歪んだように笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6834h/>

歩が歩む世界

2011年8月20日15時59分発行